

障害児通園施設みずほ学園特有の形状による児童と指導員の行動への影響に関する研究

準会員 〇三上 妙*1 正会員 福沢亜希子*2
正会員 三浦昌生*3

障害児通園施設 児童の行動 軌跡調査
ヒアリング

1. 研究の目的

児童施設において、心身ともに発達途上にある児童は、周りの環境によって様々な影響を受けやすい。特に児童施設の構造によって児童や指導員の動きに特徴があらわれるのではないかと考えられる。本研究では、障害児通園施設である富士見市立みずほ学園での児童と教員の動きを調査していくことで、児童の動きの特性や指導員の指導のし易さについて考察していく。

2. 調査施設の概要

富士見市立みずほ学園は、72年に就学前心身障害児通園施設として開設され、84年に建設された。その後、県道の延伸に伴う移転に際して一層充実した機能を加え、単独施設として02年に新しく開設した。現在のみずほ学園の主な特徴は、中央に園庭があり、その園庭を廊下が囲むような形状になっていること、園庭と廊下をつなぐ大きな窓が連続してあることである。また、建築構造は木造平屋建であり、建築面積617.67m²、延床面積568.75m²、敷地面積2,080.12m²である。図1に本施設の平面図を示す。またクラス編成において、みずほ学園では低学年のひよこ組から、りす組、きりん組、高学年のぞう組の4クラスに年齢ごとに分かれている。肢体不自由児と知的障害児が共に生活しているクラスもあり、障害は様々である。指導方針として、自由遊びの時間には児童を廊下で遊ばせたり、他のクラスへの移動を可能にしている。表1にみずほ学園の1日の生活プログラムを示す。

表1 みずほ学園の1日の生活プログラム

時刻	9:30~10:00	10:00~10:30	10:30~11:00	11:00~11:30
活動内容	児童が来園し、それぞれのクラスに移動する	教室や廊下で児童が遊び始める	設定保育の時間	設定保育の時間
時刻	11:30~12:00	12:00~12:30	12:30~13:00	13:00~13:30
活動内容	昼食の準備をし、各クラスごとで食べ始める	自由遊びの時間であり、食べ終えた児童から園庭で遊び始める	自由遊びの時間であり、ほとんどの児童が園庭で遊ぶ	お昼寝の準備をし、お昼寝をする
時刻	13:30~14:00	14:00~14:30	14:30~15:00	15:00~15:30
活動内容	ひよこ組は帰る	おやつを食べる準備をし、おやつを食べる	おやつを片付け、帰る準備をする ・バスが迎えにくる	児童は全員バスに乗って帰る ・指導員は職員室に移る

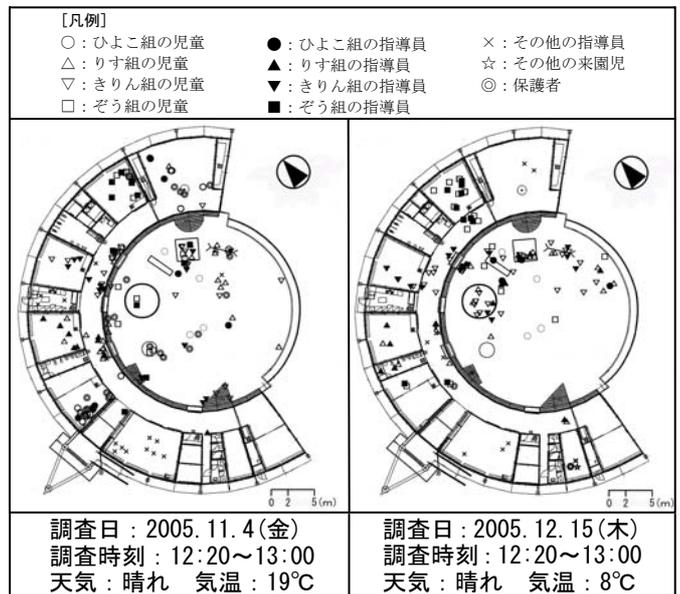


図2 第1回目調査における居場所累積図 図3 第2回目調査における居場所累積図

3. 調査方法と調査結果

3-1. 児童と指導員の居場所分布調査

05年11月4日(金)と12月15日(木)に、施設内を5箇所に分け、各場所に調査員を配置し、児童が来園してから帰るまでの児童と指導員の居場所を平面図が書かれた紙に10分間隔で記録する調査を行った。

調査の結果、児童と指導員の居場所の範囲が広い時間帯は10:00~10:20と12:20~13:00であることがわかった。図2、図3にそれぞれ異なる日の12:20~13:00における児童と指導員の居場所を累積した平面図を示す。児童が自由に動き回れる自由遊びの時間帯には廊下、園庭やホールなどに児童と指導員の居場所が分布している。特に、園庭の北側に児童と指導員が多く分布している。理由としては、園庭の北側に遊具が配置されていることと、園庭の南側や職員室前付近は日陰であることが考えられる。このような傾向があることで、指導員にとっては児童に目を配る範囲が限られ、指導する上での負担が少ない。図2、図3から

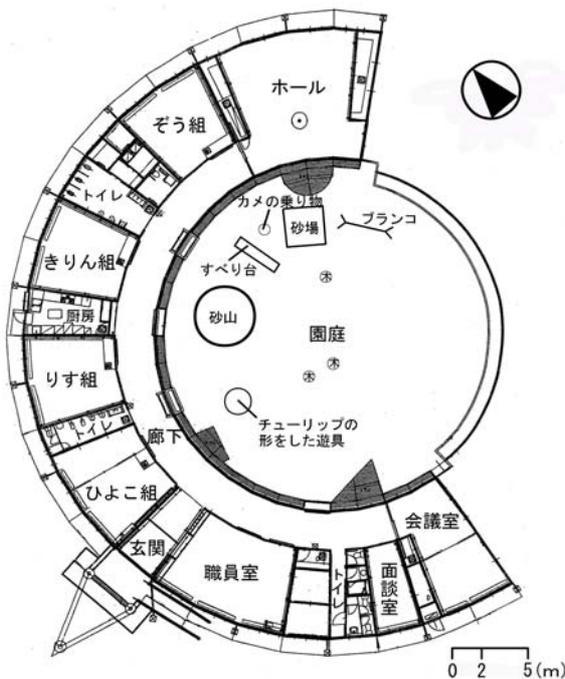


図1 みずほ学園の平面図

もわかるように、園庭にいる指導員が室内にいる指導員よりも比較的少ないことから、指導員は児童について回ることなく、児童を自由に遊ばせながら指導していることがわかる。

3-2. 軌跡調査

05年11月25日(金)と12月19日(月)に、児童と指導員の動きが盛んである時間帯を含む9:50~10:30と12:00~13:00に、知的障害児3名、車椅子で生活をしている肢体不自由児3名、指導員3名からなるぞう組の行動軌跡を追い、同時に誰と何をしたのかを記録する調査を行った。図4~図6に指導員の軌跡、図7~図12に知的障害児の軌跡を示す。

(1) 12:00~13:00における指導員の行動についての考察

図4~図6より、指導員①は主に園庭で遊ぶ知的障害児3名の指導を担当しており、指導員②と③は主にぞう組の教室からほとんど離れることはない肢体不自由児3名の指導を担当している。指導員①が3名の知的障害児の指導を行うことが可能な理由として、指導員②と③が肢体不自由児の指導をしている中で、同時に園庭の様子を把握することができ、指導員①の指導の負担を軽減しているからであると考えられる。調査日には、指導員②や③がものを取りに廊下を移動する時に、園庭で遊ぶ児童の様子を見守ったり、廊下から園庭にいる児童に話しかけるなどの行動が見られた。

(2) 12:00~13:00における知的障害児の行動についての考察

図7、図10より、知的障害児Aは園庭にある遊具を利用して遊ぶことが多いことがわかる。また、他のクラスの児童と一緒に遊ぶ様子が見られた。図8、図11より知的障害児Bは園庭全体を動き回っていることがわかる。また、ぞう組以外の児童と遊ぶことはほとんどなく、一人で遊ぶ様子が見られた。図9、図12から、知的障害児Cの軌跡の特徴はあまり見られなかったが、他のクラスの児童と一緒に遊ぶ様子を見ることができた。このように、児童の園庭での遊び方には、それぞれ異なる特徴が見られた。

(3) 軌跡調査結果のまとめ

天候や気温によって、行動に変化があることは予測でき、人の行動をひとまとめに表現することは困難である。しかし、2回の調査で児童の行動や軌跡にいくつかの共通点が見られたことから、児童の動きにある程度の傾向があることは考えられる。

3-3. ヒアリング調査

06年1月20日に、軌跡調査を行ったぞう組指導員3名に、みずほ学園における指導のしやすさについてヒアリング調査を行った。表2に児童を指導する上で感じるぞう組の指導員の意見を示す。調査の結果、特にみずほ学園特有の円弧形建築であることと、廊下と園庭をつなぐ大きく開放的な窓があることにより、指導員が常に児童のそばについていなくても、児童の動きを把握しやすいという意見を得ることができた。また、一人の指導員が複数の児童の様子を把握することも可能であることがわかった。

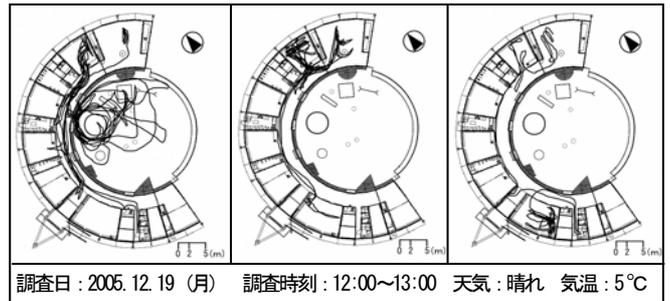


図4 指導員①の軌跡 図5 指導員②の軌跡 図6 指導員③の軌跡

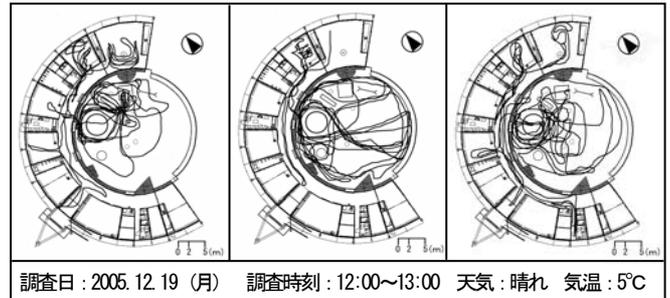


図7 知的障害児Aの軌跡 図8 知的障害児Bの軌跡 図9 知的障害児Cの軌跡

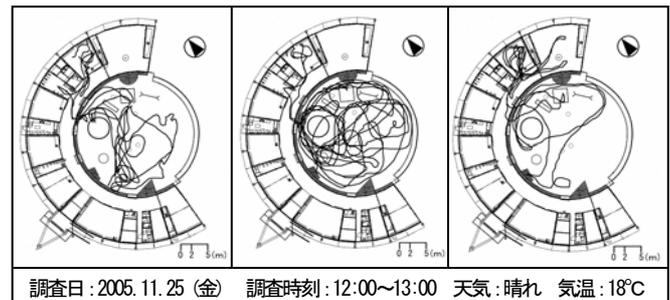


図10 知的障害児Aの軌跡 図11 知的障害児Bの軌跡 図12 知的障害児Cの軌跡

表2 児童を指導する上で感じるぞう組指導員の意見(抜粋)

- ・廊下から園庭を見渡せるので、廊下で作業をしていても児童の居場所を把握でき、様子がわかる。
- ・児童にとってこれだけ走りやすいところがある廊下はなく、児童が走り回っていても、木造なので転んでも安心である。
- ・意識しなくても児童の動きが目に入り、児童の安全を確認できる。

4. まとめ

今回、児童と指導員の居場所分布調査や軌跡調査を行ったことによって、みずほ学園で児童や指導員が集まりやすい場所やそうでない場所を把握することができた。また、みずほ学園のぞう組児童は1日の生活プログラムの流れに沿って、各々が自由に動きまわり、児童一人一人の行動パターンにある程度の傾向があることがわかった。多くの児童を、限られた人数の指導員が指導していくことが可能なのは、みずほ学園特有の形状が大きく影響しており、それぞれが異なる場所においても、複数の児童の居場所を把握することができるからである。また、本研究結果が児童と指導員の動きの傾向を表していることから、指導員が児童を指導する上での有力な資料となることがわかった。

*1 芝浦工業大学学部生

*2 岡村製作所(当時芝浦工業大学学部生)

*3 芝浦工業大学システム工学部環境システム学科 教授 工博

Bachelor Student, Shibaura Institute of Technology

Okamura

Prof., Dept. of Architecture and Environment Systems, Shibaura Institute of Technology, Dr.Eng.